学士学位記授与式式辞

令和４年度数学・数理解析専攻長
前川 泰則

皆様、この度はご卒業おめでとうございます。

コロナ禍により一昨年度まで教室での学位記授与式は実施できませんでしたが、同窓会ならびに数学事務室の皆様のご尽力により、昨年度に引き続き今年度も、対面での学位記授与式を実施することができました。皆様の門出を一緒にお祝いすることができ、大変嬉しく思っています。また、開催にあたって多くの準備をしていただいた同窓会と数学事務室の皆様にあらためて感謝申し上げます。

長く続いたコロナ禍も、ようやく出口が見えてきました。大学の危機対応レベルも、現在は１マイナスですが、５月８日からレベル０になる予定です。この３年間、特に昨年度までは授業をはじめ課外活動の制限も大きく、勉学や友人関係を築く上でいろいろな困難や苦労があったことと思います。この間、社会インフラとしてオンライン化・電子化が進む一方で、対面でのコミュニケーションでこそ築かれる信頼関係やインスピレーションの重要性にも気付かされました。立場上、他専攻の先生と話をすることがありますが、たまに質問されることが、例えば共同研究において「数学は実験とかが無いからオンラインの打ち合わせだけで研究できるのではないか」といったことです。当然のことながら、実際にはそれほど単純ではありません。勿論、オンラインしか方法がなければ次善の手段としてそうしますし、あるいは、お互いによく知った研究仲間同士でほぼ完成した共同研究を後はまとめるだけという段階であればそれでもよいのかもしれません。しかし、研究の黎明期であったり、行き詰まって時間をかけた深い議論が必要だったりする場合は、オンラインではなかなか難しいものです。対面であれば、黒板を前にチョークかコーヒーを手にしてお互い行ったり来たり歩いて、時には雑談をしながら考え込んで長時間経過する、ということはよくありますし、そのシーンを経験すること自体はさほど苦痛ではありません。しかし、これがオンラインになると、相手の様子もよくわからないまま、パソコン画面を前に無言が続くことになります。この状態で議論を長時間続けることは難しく、知り合って間もない相手の場合はなおさらです。また、直接会って話す中で偶然、共同研究の芽が生まれるということはありますが、オンラインではそうした機会はあまり得られません。結局、共同作業において、０に近い状態から新しく物を生み出す、あるいはそのきっかけを得るためには、一見“無駄”に思えるような時間や空間を、直接共有していくこと

も必要で、そうした“無駄”を共有する手段として、対面でのコミュニケーションは相性がよいのではないかと思います。

さて、皆さんは京都大学理学部で数学を学ぶことを決意され、これまで研鑽を積んでこられました。今、社会からの数学の需要は非常に高まっています。大学院に進まれる方、大学を離れる方、どの方についても、この京大数学教室で、時間をかけてじっくりと数学と向き合った経験は必ず皆さんの今後の支えになると確信しています。皆さんは、皆さんが積み重ねた時間、そして、脈々と受け継がれてきた数学教室の歴史に育まれています。是非そのことを誇りに感じていただき、自信を持ってそれぞれの道を歩んでください。

感受性が豊かで活力のある若い世代の皆さんが、これからの時代の主役です。皆さんのご活躍を期待しています。あらためて、ご卒業おめでとうございます。